■ 編集だより

編集後記

近年，社会認知神経科学という分野の研究が盛んになってきている．この領域では，広く言えば社会的活動，狭く取れば人と人との間で行われる対人交流の脳基盤とその異常が，分子レベルから脳マッピングまでの様々なレベルで研究されている．局在脳損傷研究の立場から言えば，対人関係の神経心理学である．最も基礎的な認知活動としては，他人，特に他者の顔の認知についての研究があり，個人の弁別や同定，表情の認知，視線認知，そして他者の意図や志向性の理解がどのように行われているかが徐々に明らかにされており，他者の持つ社会的な信号の知覚，認知，判断，推論に関与する脳領域としては，紡錘状回，扁桃体，上側頭回・溝領域，側頭・頭頂接合部，前頭葉外側部および内側部，そして，前頭葉眼窩野が重要であることが分かってきている．

社会認知神経科学の対象は，他者の理解機構の解明に留まらず，経済行動，利他主義，更には道徳の脳基盤の解明にまで至ろうとしている．昨年，欧米では，2つの専門誌（Social Neuroscience と Social Cognitive and Affective Neuroscience）が，新たに発刊された．研究がどんどん進むことは疑うべくもない．この分野の研究の対象は，「社会」であるので，研究の結果は，当然社会に直接的な大きな影響を与える．この際，おそらく，科学的知見の一般化の過程が非常に重要になる．情報が，ほぼリアルタイムに，しかも過不足なく，一般に知られることが大切である．また，予防医学および教育への応用が適切に行われなければならない．しかし，このプロセスがうまく行くかどうかについては，かなり不安である．「社会」に関する科学的研究の一部を取り入れた，あるいはデータを曲解したにせ科学的理解による啓蒙や教育が拡大するという危惧がある．本邦における TV のでっちあげ報道に関しては，その内容が，ついに雑誌 Nature（2007 年 2 月 22 日号）の「News」セクションにおいて報告された．「社会」認知神経科学の知見が，迅速かつ適切に社会に戻されることを切に希望したい．

加藤元一郎